

平成 25 年度 第 4 回 高知県人権教育推進協議会まとめ

日 時 平成 25 年 11 月 7 日 (木) 14:00～17:00

場 所 高知会館 3 階 飛鳥の間

議 題 「自尊感情を育む教育の推進」

(●会長 ○協議会委員 ◆事務局)

●前回までの議論のポイントを振り返りたい。

- ・第 1 回目には、人権教育を実践するなかで、自尊感情を育成することは人権意識を育み、学力、体力の向上にもつながる。地域、学校、家庭で子どもが褒める場面をつくり、成功体験を量的に保障していく。一方で、大人も子どものモデルとして、自尊感情を高めていく必要がある。また、厳しい状況の子どもや発達障害のある子どもを含め、多様な子どもたちにどう取組を進めるか、という意見もあった。
- ・第 2 回目は、学力の遅れや課題の多い子どもたち、自尊感情を育む環境にない子どもたちをキャリア教育の中でどのように支援していくのか、共生の視点もしっかりともつ必要がある、という意見もあった。
- ・第 3 回目は、地域、家庭の取組の面で、「とさつ子タウン」の取組について、地域で子どもたちを主体的に育てるといふ素晴らしい取組を報告いただいた。子どもの意見を教育委員会の施策や行政施策に反映するとよいという意見や、各地域で子どもが活躍する場をどうつくっていくのかという意見もあった。

●これまでの意見を踏まえ、今後の方向性や取組について、教育委員会事務局から説明、提案をお願いする。

◆(高知県教育委員会の今年度の施策や今後の取組の方向性について提案を行う。)

●カテゴリ別にまず、「大人の自尊感情、人権感覚」、「子どもの褒め方、良さを認める環境、子どもを支える体制づくり」について取組の方向性や視点、具体的な取組について意見をいただきたい。

○教員も学校現場で困ったときに相談できる先輩や同僚等の環境が大事であり、アドバイスにより良い方向に向かうことができる。また、子どもの本音を聞くことが大切である。子どもや保護者、同僚の声をしっかり聞き、助け合える環境設定が大切である。

◆教員というスタンスが、日頃、学校の中では生徒に対して上から目線で話しているところがあり、自分の弱いところを見せないようなところもあるかと思う。現在、人事評価の面接が年 3 回あり、その場も活用できる。また、日常的にお互いがどれだけ本音を話してできるかが大切である。

○部活動の指導においても、教員が子どもの特性を十分に把握したうえで指示を出すことが大事。その時に、教員の意図を子どもに伝えることで、子どもも理解でき、教員と子どもの信頼関係や教員と保護者の信頼関係の構築にもつながる。また、人権問題やさまざまな課題をもっているご家庭、子どもの実態に先輩の教員がどう理解を示し、対応してきたか、若年教員が学ぶ研修にも体系的に組み込む必要がある。

◆若い教員のなかには、個別の人権課題に直面したことがない方もいる。若年教員や学校内の人権教育のマネジメント役を担う人権教育主任に対し、どのように体系的な研修を行うか模索したい。

●人権感覚を高めるような研修や、学校の OJT で育てられたということはいかがか。

○大人の自尊感情や人権感覚では、大人の不用意な発言や行動が、子どもの人権を阻害している場合がある。

また、学校における人権教育については、個別の人権課題の授業を体系的にさらっと行うことで、人権教

育ができた、あるいは、実践したような感覚になっている状況が非常に多いのではないかと。30～40年前の同和教育と今日の人権・同和教育の在り方が一緒でいいはずはない。例えば、地域改善事業後の今日、地域のフィールドワークを学習するならば、今の子どもたちの保護者は、環境が改善された中で育ち、昔の状況を知らない。保育園の保護者に至っては、祖父母がそのような状況で、3代続いて知らない状況もある。子どもたちに授業をする有り様については考えていかなければならない。まずは、大人、教師が、個別の人権課題についてしっかり学び、理解し、その行動力を培っているかが問われる。生命の尊厳や人間性、教育者、地域人としての在り方といったものをしっかり教師が理解し、常に子どもや同僚を人権の視点で見ていく、まさに人権文化ができていないといけない。自分自身の変革に迫る教育が必要。

○人権感覚で一番大事なことは、他者意識に立てるかということ。自分が行動する時に相手はどう思うかを想像して行動する力が、発達障害により乏しい子どもや大人もいる。一生懸命生きておられ、教師の場合も一生懸命に指導をされている。しかし、この言動をした場合、子どもや保護者がどう感じるのかということが分かりにくい方がいる。結論は、やはり職業に適した人選が非常に大事。その教員がトラブルを回避できるように支援しても、トラブルになることがある。その教員だけでなく、子どもや保護者にとっても不幸だということを、委員会の方には理解していただきたい。指導力や教材研究等は研修でつけることができるが、教師に絶対欠かせない能力は、対人関係能力、コミュニケーション力。それは、イメージ力がなければその力は十分発揮できない。研究分野での職業に就けば、能力を発揮できたと思われる教員に今まで何人も出会った。そのような状況を理解していただきたい。

●教員の適正、採用に関わる問題にもなると思うが、試験方法や短時間で見抜く能力等、採用側の力量も問われる。また、子どもの褒め方やその環境、子どもを支える体制づくりについて、地域と学校が連携して、子どもが地域で主体的な活動ができる場をつくるという点ではいかがか。

○教員に感じる気持ちがないと、学んだ知識が目前の子どもに反映されない。指導をしても改善することが難しい教員もいるが、発達障害等のある教員の良さを伸ばすのは管理職の力である。周囲で支える教員への支援も大事であり、みんなで頑張っていこうと常に学校の中で話していくことが大事。また、臨床心理士を目指す大学生に相談できる機会を月1回設定し、保護者の相談の合間に、教員も相談している。仕事上の評価も大事だが、教員が評価に追い詰められているように感じる。教員同士でみんなが楽しんでやろうという雰囲気や、一人で抱え込まないようサポートする組織や仕組みが必要。教員が子どもを指導する時に、「あなたの行動の背景のしんどさはよく分かった。しかし、これはだめだよ」と指導することで、子どもも良い方向に変わってきた。学校で自分は大事にされている、楽しい学校だと子ども自身が思えなければいけない。先日、地域の方や警察の方に劇を披露し、褒められ、努力を認めていただいた。

●教員自身も自分たちが大切にしてもらっている実感がないと、人権感覚や人権意識もなかなか高まらない。その学校のサポート体制がとても重要だ。その他にはどうか。

○ベテランの教員でも今までの人権感覚や指導方法では駄目な場面がある。研修も大事だが、学校内でのOJTや気を付けなければならないことがある。教員の発言に対して、保護者や生徒が教員の意図と違う受け止め方をする場合もある。その都度、気になった事について話をし、人権感覚を高めることが大事。今までは良かったという感覚は気を付ける必要がある。

スクールカウンセラーが配置されているところは、保護者や教員も悩みを相談できる。しかし、ベテランの男性は、さまざまな悩みを言えない環境にあるのではないかと。面接や研修もあるが、普段どれだけ声

を掛け、話を聞くことができるか。管理職がそれぞれの教員と日々つながり、気になった時にはすぐに声を掛けたりすることが大事。人権感覚を管理職も教員も互いに高めていく必要がある。

本校は礼節を重んじ、生徒指導も厳しいと言われる。生徒は最初そのやり方に納得していないと思うが、外部から褒められたり、就職や進学の時節に褒められたりすることで大切なことを実感する。褒めてもらうためには努力や忍耐も必要。基本的な生活習慣の基盤のうえに、勉強や部活動等を積み上げていける。

- 横断的な共通事項について協議をいただいたが、多様な子どもがいる前提の学校、学級経営が必要だといふところや、キャリア教育において、共生の視点を取り入れての推進について、学校の現場ではどうか。
- 志育成型夢いっぱいプロジェクト事業を行っているが、校内において事業の位置付けが不明確な場合、キャリア教育も含めて研究の柱を2つ取り組んでいると教職員が捉え、多忙感が増す。学校の課題として、キャリア教育をどう内在しているのか整理し直すことが大事。共生の視点を改めて入れるというよりは、その視点はもともと入るべき視点であり、各学校が位置付け、どう取り組むかが大事ではないか。
- キャリア教育については、県の教育委員会で総合的な学習の時間や道徳、人権教育等をそれぞれ体系付けて計画し、取り組むように発信されているが、学校現場ではまだ十分理解されていない部分もある。今、取り組んでいるもの全てをキャリア教育の視点で体系化していく。例えば、就学前では老人クラブと交流する中で、高齢者となつながら、高齢者の温かい気持ちに触れる等をキャリア教育、人権教育、総合的な学習の時間、あらゆる教科領域の視点で整理してみたら、「キャリア教育ってこういうものか」と気付くことができる。それぞれ別箇に体系付けるのではなく、できれば就学前の段階からトータル的にしっかり作成すること。キャリア教育の視点や人権教育の中での位置付けが教員にもよく理解されるのではないか。
- 県の「高知のキャリア教育」を受けてA市は全体計画を作成した。キャリア教育は人の在り方や生き方を追求していく教育であり、あらゆる教育の活動内容が全て盛り込まれていると捉えることができる。自校の現状から課題を洗い出し、年間に付けたい力を4つの観点で、教育活動のどの教科、単元で育成するといった年間計画の作成を進めている。年度末に次年度の計画が出来上がる予定である。学校だけではなく、家庭や地域と連携して、いろいろな人々と多種多様な関わりをする中で、共生という視点ももちろん入っている。人間関係形成能力も盛り込まれ、縦横斜めの関係の中でさまざまな場面で人と関わりながら子どもたちを育て、また子どもたち自身も育っていくという観点から取り組んでいる。
- 自分の生き方や在り方がつかみにくい子どもの中には、家庭的に非常につらい状況や、発達に偏りがある場合もある。そのような子どもが集団の中で生き生きと活動し、自分の生き方をつかんでいくための支援を、学校の先生たちと一緒に考えさせていただいている。

県のキャリア教育の方向性はとても素晴らしいが、生き方や在り方を育むものであると、教育現場はまだ捉えきれていない。特別支援教育も、現場の先生たちの知識は十分にあるが、目の前の子どもとその知識がつながっていないところもあると思う。学校の先生たちにどう理解していただくか、知識の伝達では実践につなげにくい。大切なことを浸透するためには、体験や実習、ワーク等の研修が必要。

スーパーバイザーとして、スクールカウンセラーさんたちに、学校で先生方のことをしっかり観察し、日々の一生懸命な頑張りや、目立たないけど頑張っているところを見つけ、伝えていくよう助言している。そのような中で、先生と人間関係ができ、いろいろなことが入っていく。絶対評価で認めてくれた人がいたときに大切なことが入るように思う。

- 行政の視点も含めたキャリア教育の本質的なものを学校現場にいかにつなぐ、教員が必要を実感し、実践

に生かすかというところが、これからの課題ではないか。また、多様な子どもへの個別支援の在り方については、今後、研修の充実や事業の重点化、人材育成という意見が出ているが、いかがか。

○個別支援については、やはり教員の気付きが大切である。特性を生かした工夫が、子どもの支援に必要である。教職員がいろいろなことを言い合い、互いを認め合いながら、いいところを伸ばすことができる職場の環境を大切にしている。また、特性について理解するための校内研修では、発達障害の疑似体験やそれに近い体験を入れたり、自分の失敗談なども子どもの支援に活用できること等を話したりしている。人権教育を柱にキャリア教育や道徳、基本的な生活習慣も人権教育に絡め、学校改善を進めてきた。学校として生徒にどんな人になってもらいたい、自分の行動に対する責任をとることなどを常に言い続けている。

●「人権が尊重された家庭づくり」で、厳しい立場の子どもと保護者を支援する取組や、悩みを持っている保護者にどのように研修に集まってもらえるかなど、厳しい環境にある子どもたちと保護者の支援、保護者と家庭づくりの視点から意見をいただきたい。

○市町村の行政にお願いがある。要保護の家庭支援については、電話での問い合わせではなく、年度始めに文書をもっての会があり、後に連絡のものを出していくような形にさせていただくと有難い。

○要保護家庭で、虐待等の状況について年に3回情報交換するが、状態が良くなれば終結する。これまでの状況の引き継ぎもあり、最初は直接ご挨拶にも来てくださり、今年度の年間の計画もお話いただく。しかし、電話で福祉の部署から子どもの状態を問い合わせられても、回答を遠慮させてもらっている。支援は大事であるが、個人情報であり、そのように統一して、最初に話し合いを持てるようにしていただきたい。

○悩みを持つ保護者が、どうすればPTA研修会に参加できるか、これまでもこの課題を考えてきた。平日の昼間や夜間、土日も研修日を設定するが、大半の参加者は同じ顔ぶれである。そのような状況で、「今後の取組の方向性」では、方向性や行くことが今までと同じであり、方向性を変えていただきたい。

PTA保護者はいろいろな職種のプロであるが、教育分野で研修テーマを求められても、身近にあることしか思いつかない。また、多数の保護者を集めたい研修でも、家庭の電話番号も分からない状態で、人集めは本当に困難。先生方も集まらない。先程の発言のように、先生を褒めたら、「褒めてくれたき、ちょっとこの会出てみたい」と先生方も思ってくれるのではないかと。

子どもが幼稚園・保育所、小中学校の頃から会の出席回数が多い人がPTA役員になっている。指導的なことをあまり経験せずに役員になられた方が多く、人材づくりや人集め、研修会の企画や実施方法等を学べる研修会や、保護者がこのようなことで困っており課題であるというような情報提供の場、会長同士が集まった研修会があるとよい。また、カウンセラーの方に指導をしていただく内容や、携帯電話、中途退学もテーマにすれば、保護者も集まるのではないかと思う。

●対象は大人になるので、違うニーズがもっとたくさんあると思う。私たち役員に研修をしていただくとうれしい。PTAの企画力を高めるといった視点もお願いしたい。他にはどうか。

○これまで、同和教育、人権教育で一番大切にしてきたことは、「親や子どもに寄り添うこと」である。寄り添わないとその子のよさも自尊感情も育成できない。また、キャリア教育は、同和教育の中では進路保障であり、「進路保障は同和教育の総和」として取り組んできた。文科省もいじめは心の問題ではなく、将来どのような生活を立て、どういう生き方をするのかという進路保障の問題をやれば、いじめの問題はなくなると思う。毎年私たちが文科省、厚労省と話し合いをする中で、進路の問題として不登校の問題を取り組まなければいけないと、文科省が言う。取組の基本は、親や子どもに寄り添うこと。その実態から子ど

もを良くし、地域をよくする。社会を良くするためには、子どもや家庭、地域に寄り添えば、ニーズが見えてくる。その中から私たちが事実に対して実践を行うことが大事である。

数十年前、全国同和教育研究大会において、本県の中学校が、「非行児はわが校の宝である。非行児、問題の子どもはわが校の宝である」ということを報告した。問題行動をする子どもが、我々の取り組まなければならない教育課題を提起しているから、非行児はわが校の宝だ。その事実に対して我々が実践をしなければいけない、という報告だった。その研修で学んだことを学校の職員会で研修し、人権が尊重される学校づくりや学級づくりを実践することが、家庭への支援や地域づくりにつながるのではないかと。

●第3回目の協議会での「とさこっタウン」(<http://tosacco-town.com/>)の事例からも地域づくりの視点や子どもが主体となった取組を行うための意見はいろいろか。

○「学びなおし」や「出張教育相談」があるが、困っている子どもはこちらが待っていても来てくれない。中途退学の方やニートの方に、出張支援のような取組は行われているか尋ねたい。支援をする場合の財政的な支援もできているか。引きこもって家から出られない子どもたちは結構多く、これからも増えると思う。相談を受けたときは、心の教育センターの方に対応をお願いしている。他にそのような出張支援や出張カウンセリング等するような場所はあるか。

◆現在、高知市ふくし交流プラザと黒潮町の2カ所サポートステーションがある。その他にサテライトが4カ所ある。サポートステーションに登録いただいた方でも、サテライトにもサポートステーションにも出てこられない方もいらっしゃるの、こちらの方から訪問支援を行ったり、送迎サービスという形でサポートステーションにつなぐ支援を行ったりしている。

○サポートステーションから行かれる方は、心理的な専門の方かどうか尋ねたい。引きこもっている子どもたちの中には特性があったり、コミュニケーションや対人関係が非常に苦手な場合もあったりする。一般の方が行かれても関係が作りにくいことや、もう一つは一度お会いして関係がつけられなかった場合、その子どもたちはなかなか次へ進めないということもあるため、心の教育センターをお願いすることが多い。

◆サポートステーションの方にも臨床心理士の方に来ていただいている。ただ、訪問支援のときに臨床心理士の方が、100%同行しているという状況ではない。

○高校を中退した子や引きこもっている子に対して、実際には在籍校での勤務歴が長い教員や生徒指導主事、教頭が対応してきた。過年度の生徒に対応することも仕事だという認識を教員に持ってもらうためにも、校務分掌において過年度生対応を来年つくろうと考えている。担当教員が窓口として、担当学年であった教員に中継役をする。孤立している家庭の保護者の方は、人とのつながりを拒絶する傾向があるため、担任が一人で行ってもなかなかつながれない。難しい家庭だから訪問をやめると、さらによくない。過年度の卒業生を関係機関やサポートステーションとつなげていくことが必要だ。

◆引きこもりや過年度の子どもの対応について、先日県内市町村には教育支援センター（以前の適応指導教室）等の市町村独自の機関があり、連絡協議会を開催した。市町村については、基本は義務教育期間が対象であるが、中学校卒業後、高校進学をしない、就職もできていない、さらに深刻な引きこもった子どもたちへの支援が課題となっている。市町村によってはそのような過年度生への支援を徐々に始めたところもあり、心の教育センターが市町村の依頼に応じて、相談員や指導主事がその家庭に訪問支援を行っている。よい方向に進んでいる事例として、家庭訪問する場合、必ず相談員、住民課の保健師、教育委員会、精神保健福祉センターも関わる市町村もある。市町村の支援体制を知ったうえでケースに応じた有効的な

連携の在り方を考えていかなければいけない。

- 本当に厳しい家庭が多くなり、社会情勢からこれからも大変な状況になるかもしれない。一家族の多問題を解決していくために、地域と学校、福祉、警察さまざまな機関の連携が大事である。他に地域づくりの視点でのご意見はどうか。最後にお気づきになったところはどうか。

○地域で子どもを育て、応援していくというところもあるが、その地域で子どもの出席状態や保護者の私生活までを細かくチェックされて、保護者はとても精神的にしんどくなり、子どもも学校に行き辛くなっている事例もある。周囲が支援をすることは大切だが、支援の仕方について、善かれと思ってやっていることが、本当にその方の立場になったときにどうかというところはわからない。結局、そのご家庭は転居した。地域で世話しているのだから、というふうになると押し付けになってしまう。また、仕事や形式だけで動き出すと、本人の望まない支援になってしまう。だから、「寄り添う」ということは、寄り添い方が大事ではないか。専門知識のある方と一緒に考えていかなければと思った。

- 支援者の適正や見立てもあるが、その人にとってどういう支援が必要なのかということをしっかりという。いろいろな機関と連携しながら考えて支援していくという、見立てやアセスメント（支援）が必要。そこは研修をしたら伸びていくところかと思う。他に全体的なところでのご意見はどうか。

○勤務している市町村では、教育振興基本計画を策定しているが、これまでは「子どもを見守る」という視点で関わってきた地域の委員の中から、「学校や家庭だけで子どもたちを育てる時代ではなくなっている。地域住民が一体となって、子どもを『見守り、育てる』までいく体制づくりが今こそ必要だ」という意見が出た。「育てる」という意識に立ったとき、大事なことは、やはり「寄り添う」とか「相手の立場に立つ」視点は欠かせない。子どもへの対応や支援のための研修も進めていく必要がある。また、保護者も子育てについて困ったときに、ここに行けば気軽に相談できるという広報やシステムも必要だと考える。

○体制だけでなく、「気軽に相談できる雰囲気づくり」が一番大事。悩みをすぐ相談できる、また重大な懸案があれば、すぐ校長先生まで流れる学校の体制があれば、いろいろな解決方法が見出せる。学校、家庭、地域でもいろいろなことが気軽に相談できる雰囲気づくりが大切であり、管理職の方、また同僚の方々は普段から話す雰囲気づくり、堅苦しい話は抜きで話せる体制づくりをしていただきたい。高校は教員の部屋もバラバラで、顔を合わせる機会も少ないと思う。同じ悩みを持った集団が集まっても問題は解決しないので、他の課の先生方と話したら、多面的な解決方法も提示される場合もあると思う。体制も大事だが、やはり気軽に相談できる雰囲気を学校現場や我々地域でもつくっていききたい。

- これまでの協力に大変感謝する。事務局の方でこれまでの意見をさらに見直し、ブラッシュアップして、「自尊感情を育む教育の推進」を施策で反映していただきたい。子どもの人権感覚を育てるための大人の人権感覚の育成や、教員の支援体制の工夫、スーパーバイザーやスクールカウンセラーも含めたフォロー体制、教員の人権感覚の醸成、人権課題についての認識を深めていくこと、教員の適正の問題や育成する体制、キャリア教育における「共生」の視点や子どもの人権意識の育成などを今までの取組と関連、体系付けて、ますます推進していく必要がある。「家庭づくり」では、厳しい家庭への連携による支援、子どもたちの地域や学校での居場所づくり、地域での子どもの育成体制が大事になる。「地域支援」では、厳しい家庭や子どもに適切な支援ができるような研修の充実が必要である。

「自分の幸せ」とは何かということも考えての自己実現は、まさにキャリア教育である。もう一つの「他者の幸せ」について想像して思いやるというところを育てたい。